

市政運営の3つの柱

健康

子どもが健やかに育ち、生涯笑顔で過ごせるまち

デジタル田園都市国家構想で採択された「ベーシックインフラ整備事業」※の核となる、データ連携基盤の活用を始めます。これにより市民の皆さんの健康状態の見え方を図ります。

また、できるだけ多くの皆さんに健診を受けてもらえるよう取り組むほか、より健康的な生活を送るための健康相談や健康教室、運動講座なども民間事業者と連携しながら充実していきます。



▲父母ヶ浜で開催された「暮らしの体力測定」

教育

知・体・心を育み、自分らしく暮らせるまち

学ぶ場、学ぶ方法など、学びたいと思う人に「学び」の選択肢を増やしていきます。

その1つとして、「学校教育の一貫」と当たり前のように言われていた部活動の地域移行について進めていきます。「三豊市ではできない」と子どもたちに諦めさせていた現状を打破し、「三豊市だからできた」に変えたいと思います。そのために、部活動改革ではなく「放課後改革」に取り組みます。



▲2月に設立された「三豊市文化・スポーツ振興事業団」

三豊市独自の脱炭素社会

人と自然が守られる定住のまち

私たちが取り組むべきは当然、温室効果ガスを減らしていくことですが、その方法は見えにくいものです。現在は、再生エネルギーの導入が主流ですが、土地が狭い香川県では選択肢が限られています。

こうした中でも、本年度は高気密高断熱住宅（エネルギー消費の少ない住宅建設）についての補助金を創設します。これから、さらに多様な取り組みを展開していきます。



▲児童への啓発を目的とした「省エネ出前授業」

令和5年度 施政方針と予算

可能性を切り開くまちづくり

令和5年第1回市議会定例会の初日、山下市長は令和5年度の施政方針を熱く演説しました。第2次総合計画の5年目となる本年度の予算は、財政健全化を図っていくとともに、未来へ向けた投資を進めるため、同計画に掲げる重点プロジェクトへの配分を重視して編成しました。



▲施政方針全文はこちらから



転換期にある社会の中で

今、世界は大きな変革の時代に入っています。私たちが意図せず、好むと好まざるに関わらず、私たちは大きな転換を求められています。その1つが、いうまでもなく新型コロナウイルス感染症です。政府はこの新型コロナウイルス感染症について、5月8日をもって感染症法上の分類を危険性、重篤性の高い2類から、季節性インフルエンザと同じ5類へと変更することを決めました。大きな峠は越えたかに見えますが、果てしない闘いの道であること、改めて私たちに突き付けたものであることは間違いありません。そして、もう1つはロシアによるウクライナ侵略です。ロシアがウクライナに侵略を開始したのは、まさに1年前の今日、2022年2月24日でした。私たちはいつの間にか私たちが、特に私たち日本人が当たり前のように享受しているこの「平和」が、どれほど脆いものか思い知らされました。今現在もウクライナでは、多くの人が、多くの無辜の子どもたちが傷付き、命を落としています。この理不尽な行為を私たちは決して許してはいけません。今を生きて私たちが、平和の意味をもう一度考え、行動する時期なのではないでしょうか。

※無辜…何の罪もないこと

ただ、平和と言いつつ、本当に今、日本は平和なのだろうかと思えてしまいます。ウクライナ情勢は、確実に私たちの生活に影を落としています。燃料費高騰などによる電気料金の値上げ、建設、農業、食料品材料の高騰などによる史上稀にみる物価高となり、私たちの生活は大きな打撃を受けています。新型コロナウイルスから3年、ロシアによるウクライナ侵略から1年、私たちの、そして子どもたちのマスクの下は本当に笑顔なのでしょうか。未来はもっともっと明るいものであること、もっともっと豊かであることを子どもたちに教えてあげなければなりません。年齢を問わず、市民の皆さまがそう感じられるまちに、社会にしなければなりません。そのために、私は全力で取り組む覚悟であります。

3本の柱とデジタル化

具体的には「健康」「教育」「三豊市独自の脱炭素社会」であります。これは、昨年の施政方針でもお話ししていたのですが、この3本の柱を令和5年度はさらに発展させ深めてまいります。そして、これらの施策の中心的役割を果たすのがデジタル化です。このコロナ禍で急速に世の中のデジタル化が加速しました。既に、デジタ

ル技術は、私たちの日常生活の中で欠かすことのできないものになっています。

しかし、これらは私たちの生活を便利で豊かなものにするための1つの手段にすぎず、それだけで私たちが抱える全ての課題を解決できるわけがありません。めざすべきは皆さまが幸せに日々を暮らせることであり、より安心で安全に、豊かさを実感できることでもあります。そのために、多様なニーズに合ったきめ細やかなサービスを提供できるよう、デジタルの利点を最大限に活用します。デジタル化はそれ自体が目的ではなく、私たちの暮らしを守り、人と人、コミュニティのつながりを持ち続けるための裏方的な役割であります。

こうしたデジタル化を背景として、令和5年度は、今年度に引き続き「健康」「教育」「三豊市独自の脱炭素社会」を施策の中心に据え、SDGsの目標の1つでもある、「住み続けられるまちづくり」に取り組んでまいります。

※SDGs…持続可能な開発目標



むすび

本市の総人口は、本年2月1日時点で59,568人となりました。合併以来減り続けた人口は、ついに6万人を割り込みました。また、昨年の出生数も292人と、合併以来最少となりました。この人口減少に歯止めをかけるためには、ありとあらゆる手段を講じなければなりません。この状況を唯々諸々と受け入れる訳にはいかないのです。私は改めて「抗い」たいと思います。

こうした状況の中でも、父母ヶ浜にはコロナ禍にも関わらず過去最高の約50万人の観光客が訪れました。また、昨年12月にはフランスの日報紙「ル・フィガロ」電子版において「日本で桜を觀賞するのに最も美しい場所」として、トップで「紫雲山」が紹介されました。日本中の人が、世界の人が三豊市を知っています。訪れたいと思っています。こうした明るい材料もあるのが、三豊市であります。

私たちは、この世界に誇れる故郷に暮らしています。何度でもチャレンジをして、どんなに僅かな兆しからでも大きな動きに変えていく取り組みを続けていかなければなりません。「あきらめたらそこで試合終了ですよ」です。市民の皆さま、そして市議会議員各位の一層のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。令和5年度に向けた施政に対する方針といたします。

※ベーシックインフラ整備事業…市民と行政、事業者が一体となって取り組む共助の仕組みにより、市民サービスを向上させる事業